

子どもの感性・思いやり・自立心を育む

自然ゆたかなドイツの園づくりツアー2026

実施レポート



子どもたちの心とからだの成長は、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで促されます。このことから、幼児施設での日常的な自然体験は、保育・幼児教育における大切な要素と言えます。『自然ゆたかな園庭がある園』は、乳幼児期の子どもたちが、日々、安心して自然とふれあい、豊かな感性や思いやり、協調性、想像力などを育む場所として、最適な環境です。

本ツアーでは、ドレスデン、ベルリンの複数の保育所・幼稚園や、幼児教育・保育機関、エコ・クラインガルテンなどを見学し、ドイツにおける乳幼児期の自然とのふれあいの取り組み動向について学びました。これはその実施レポートです。

期 間 2026 年6月 13 日(土)～19 日(金)

視察地 ドイツ ドレスデン・ベルリン

参加者 15 名

企 画  公益財団法人
日本生態系協会

後 援 社会福祉法人日本保育協会

公益社団法人全国私立保育連盟

特定非営利活動法人全国認定こども園協会

日本ビオトープ管理士会

目次

視察日程.....	2
ドイツにおける保育・幼児教育など.....	3
子どもを守るための制度	3
共生社会に向けた保育・幼児教育	3
持続可能な開発のための教育に向けた世界の潮流	3
連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト	4
ザクセン州政府の取り組み	4
ベルリン政府の取り組み	5
視察先概略	6
コーボルトラント保育所・幼稚園	6
モンテッソーリ保育所・幼稚園 キンダーラーデン・シルトクレーテ	8
ハイデンオルゲレ森の体験幼稚園	10
ベルリン特別市教育青少年家族局	12
ヴンメルブーデ保育所・幼稚園	14
エコ・クラインガルテン「ナトゥアナーエ・ゲアテン」	16
森の中の保育所・幼稚園アンネ・フランク	18
分析計測機器メーカー クナウアー社	20

視察日程

日付	時間	訪問先
6/15(月)	09:00-11:00	1 コーボルトラント保育所・幼稚園 を見学
	14:30-16:30	2 モンテッソーリ保育所・幼稚園 キンダーラーデン・シルトクレーテ を見学
6/16(火)	08:20-09:50	3 ハイデンオルゲレ森の体験幼稚園 を見学
	14:00-16:00	4 ベルリン特別市教育青少年家族局 での講義
6/17(水)	09:00-11:00	5 ヴンメルブーデェルト保育所・幼稚園 を見学
	13:30-15:30	6 エコ・クラインガルテン「ナトゥアーエ・ゲアテン」 を見学
6/18(木)	09:00-11:00	7 森の中の保育所・幼稚園アンネ・フランク を見学
	13:30-15:30	8 分析計測機器メーカー クナウアー社 を見学

ドイツにおける保育・幼児教育など

子どもを守るための制度

ドイツでは、1歳になった子どもは何らかの施設で保育を受けることが法的に保障されています。通常は1歳を過ぎてから、早い子では8か月くらいから保育所に入園します。どうしても預かってくれる保育所が見つからない場合、保護者は自治体などに対して訴訟を起こすことも可能です。

保育の制度が充実する一方、SNSなどの利用が拡大するなか、子どもの肖像権の侵害の増加などの問題が深刻化しています。こうした事態から子どもを守るため、ドイツでは、個人的な子どもの写真を保護者の許可無く撮影し、SNSなどで発信することが禁止されています。グループ写真を撮影する際にも、保護者一人ひとりの承認・署名が必要になることもあります。

共生社会に向けた保育・幼児教育

自然豊かな園づくりだけでなく、共生社会の形成に向けた取り組みも進んでいます。『インクルーシブ保育・教育』は、障がいの有無や年齢・性別・人種・言語・文化・宗教的背景にかかわらず、一緒に遊ばせながら、子ども一人ひとりの保育や教育的ニーズにあった支援を行うというものです。3～6歳の異なる年齢だけでなく、園によっては1～2歳の乳幼児も年長の子と同じグループで遊ばせているところもあります。

また、園の運営や園庭の管理、行事の企画や実施などを保護者と連携して行うといった取り組みも進んでいます。インクルーシブ保育・教育は、子どもたちの他者への理解を深め、思いやりの心や助け合いの精神を養うのに役立ち、保護者との連携は、信頼や協力を得るのに役立っています。

持続可能な開発のための教育に向けた世界の潮流

1992年にリオで行われた地球サミット以来、「持続可能な開発」は世界の環境政策の指針となっています。2002年の国連ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本政府とNGOの共同提案により、「国連持続可能な開発のための教育(ESD※ドイツ語ではBNE)の10年」が採択されました。これを受けて2005年「ESDの10年国際実施計画」(2005～2014年)が策定され、世界各国にその推進が呼びかけられました。その後、国連はこの「ESDの10年」を土台に、「ESDに関するユネスコ世界行動計画」を策定しました。

2019年、その後継として、2020～2030年におけるESDの国際的な実施枠組である「ESD：持続可能な開発目標(SDGs)実現に向けて(ESD for 2030)」がユネスコ総会で採択され、同年12月の第74回国連総会で承認されました。これは、ESDの強化とSDGsの17項目全ての実現に取り組むことを通じて、より公正で持続可能な世界の構築を目指すものとなっています。

連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト

日本と同様、生物多様性条約に批准しているドイツでは、その約束を果たすために『生物多様性国家戦略』を策定し、それに基づいて、都市や農地における生物多様性の保全回復プロジェクトなど、多岐にわたる取り組みを実行しています。地域在来の多様な植物を園庭で育てるなど、身近な生きものたちとの日常的なふれあいを促す園づくりも、政府のそうした取り組みにより後押しされています。

連邦環境・自然保護・原子炉安全省は、絶滅の危機にある多様な野生生物に対する保護の意識を幼少期から育てることをねらいとした全国規模プロジェクト『保育所・幼稚園の子どものための庭～一緒に多様性を発見しよう～(ドイツ語 Kinder-Garten im Kindergarten – Gemeinsam Vielfalt entdecken)』や、自然を観察したり、調べたりすることを通して、子どもの探究心の発達や自然についての理解や知識の向上などを促すプロジェクト『小さな研究者(Kleine Forscher)』を展開し、多くの園がこれらに取り組んでいます。また、生物多様性の豊かな園庭などについての情報提供や参加促進を目的に、現在までに3種類の冊子が発行されています。2015年7月に、第1弾の『保育所・幼稚園の子どものための庭 一緒に多様性を発見しよう！～自然豊かな園庭は生物多様性を高める～』が発行され、翌16年4月には、同『～生物多様性豊かな遊び体験～』が、10月には、同『～生物多様性 種からお皿まで～』が発行されました。



ザクセン州政府の取り組み

州政府レベルでも、持続可能な開発のための教育が促進されています。2019年1月22日、ザクセン州政府は「ザクセン州持続可能な開発のための教育戦略」を採択しました。この戦略に基づいて、ザクセン州では持続可能な開発のための教育がしっかりと実践されています。この一環で、「子どもたちの園庭 — 持続可能な学びの場！」をモットーに州レベルの「園庭コンクール」などが行われています。

2006年に策定された「ザクセン州教育プラン — 幼児教育者のための手引き」でも、州内すべての保育所・幼稚園、託児施設、学童保育施設における持続可能な開発のための教育を強化するための対策が



紹介されています。この教育プランでは、教育分野を「身体」、「社会」、「コミュニケーション」、「芸術」、「自然科学」、「数学」の6領域に区分しています。「自然科学」の領域では、「自然、エコロジー、技術」を主要な教育要素として取り扱っています。日々の生活の中での自然とのふれあいが子どもたちの思考や人格形成にとって重要であることから、多様な体験ができる身近な環境をつくることが大切だとして、教育プランでは、すべての保育・幼児施設の職員が自然や環境保護の意味をきちんと理解すること、園庭に多様な生物が暮らす環境を創出し、自然観察を可能にすることなどを求めています。

ベルリン政府の取り組み

ドイツの首都ベルリンは、ドイツ国内最大の都市であり、立法・行政の中心地です。ハンブルクなどと同様、市でありながら 16 ある連邦州の一つに数えられています。各州は、地方公共団体ではなく、それぞれ主権を持ち、独自の州憲法、州議会、州政府及び州裁判所を有する国家的な役割を担っています。したがって、地方自治制度に基づいて、州政府が制度設計等についても独自に取り組むことになります。

ベルリンでも、持続可能な開発のための教育が積極的に推進されるとともに、「保育所・幼稚園、託児所等のためのベルリン教育プログラム」が実践されています。ベルリン特別市(州)教育・青少年・家族局がまとめたこのプログラム(2026 年 6 月改訂)は、保育所・幼稚園における保育・幼児教育の基盤となるもので、保育施設から就学への最良の移行環境を確保し、すべての子どもたちが就学するまで支援することを目的としています。



この教育プログラムでは、教育分野を「健康と運動」、「社会と情緒教育」、「言語とコミュニケーション」、「数学」、「自然・環境・技術」、「美的・芸術的教育」、「メディアリテラシー」の7領域に区分しています。2014 年に改定された同プログラムでは、領域の数が6つでしたが、今回の改定により「メディアリテラシー」が追加されて7領域となりました。

「自然・環境・技術」の領域では、重要な教育要素として「旺盛な好奇心と五感を駆使して自然や周囲の環境を探究し、世界に対する独自の理解を深めていくことが大切」とし、「実験や探究のための様々な機会や教材を提供する刺激的な学習環境を設ける」、「自然や環境を観察し、自然とのつながりを発見することで、自然の一部としての自分を認識させる」、「自然とのふれあいや動物の世話などを通じて自然への敬意の心を育む」などのことが示されています。

視察先概略

コーボルトラント保育所・幼稚園

運営団体 オムゼ協会 Omse e.V.
ご担当者 施設長チーム ドリーン・ニートナー氏
Doreen Niedtner
シュテファニー・シェーファー氏
Stefanie Schäfer
URL <https://kita-koboldland.de/>
視察日 2026 年 6 月 15 日 9:00~11:00



子どもたちの年齢ごとの過ごし方

この園では、1 歳から 6 歳までの子どもを受け入れています。

1 歳～2 歳半の年少の子どもは現在 30 名で、部屋の広さに応じた配分により 12 名と 18 名の 2 クラスに分かれています。法律では子ども 5 名につき保育者 1 名をつけることとなっており、子ども 12 名の場合は保育者 3 名が必要となりますが、ここでは正規職員 2 名、2 週間交代で来る研修生 1 名がついています。12 時半～15 時がお昼寝時間で、その間保育士のうち 1 名が寝返りなどの面倒を見ています。15 時から最長 17 時 30 分までは保育延長可能で、保護者の都合で自由に自宅へ連れて帰ります。保護者との通信は連絡帳からタブレットや E メールに置き換わっているそうです。

2 歳半～6 歳の子どもは現在 60 名います。園庭に昼食スペースが設けられており、暖かい季節には園庭で昼食を食べます。年少クラスと同様にお昼寝の時間が設定されていますが、1 日の活動は子どもたちの自主性に任せています。暖かい季節は 1 日中外で遊ぶこともできます。

園舎内にはサウナ室があり、3 歳以上の子どもには冬季(10 月～2 月)利用します。服装は自由で、裸で入る子と下着をつけて入る子の両方います。暑さを我慢できる 5 分程度の間、先生が絵本の読み聞かせをし、我慢できなくなった子どもから水浴びをしたりします。ドイツでは両親が子どもをサウナに連れていくのは普通のことなので、子どもたちもこの習慣には難なく適応しています。

園の運営について

正規の職員は 24 名おり、そのうち 5 名が男性です。この男性割合は、ドレスデン市内では高い方だそうです。園を運営するにあたり、子ども 1 名につき保育料€200/月と給食費€150/月を徴収しています。それで足りない分は、国からの補助金、子ども 1 名あたり€80/月を充当しています。

園庭について

運営団体のオムゼ協会は、1990年にクメルシェンケ地区ビオトープ協会として設立され、2000年に現在の名称に変更されました。この協会が運営する 5 つの園のひとつコーボルトラント保育所・

幼稚園は、生活、遊び、ものづくりの場である自然とふれあうこと、四季折々の自然を直接肌で感じ意識させること、エコロジカルな園舎や園庭づくりに関わらせることなどを、基本的な保育・教育コンセプトに掲げています。5, 100㎡の敷地は、以前コンクリートで覆われていましたが、子どもたちも手伝ってコンクリートを取り除き、小高い丘や大きな砂場などがつくられました。遊具も自然の素材でできたものを利用しています。また、「森の日」を設けて、定期的に近くの森に遊びに出かけます。

ウサギの飼育方法の工夫

この園では、動物の世話などを通じて自然への敬意の心を育む目的で、以前ウサギを飼っていましたが、2年ほど前に野生動物に襲われて死んでしまいました。それを機に、現在ウサギの飼育方法を見直し中です。以前は、日本でも一般的なウサギ小屋で飼っていましたが、新しい飼育方法では小屋を無くし、子どもが入ってもよいエリアにデッキをつくり、その上で待ち、ウサギの方から近寄ってきた場合にのみ、ふれ合ってもよいことにする予定です。



モンテッソーリ保育所・幼稚園 キンダーラーデン・シルトクレーテ

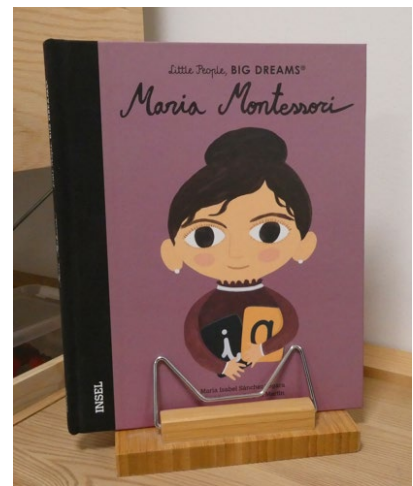
運営団体 キンダーラーデン・シルトクレーテ協会
kinderladen Schildkröte e. V.
ご担当者 教育長 アネット・シェーンフェルダー氏
Pädagogische Leiterin
Annett Schönfelder
URL <http://www.kinderladen-schildkroete.de/>
視察日 2026 年 6 月 15 日 14:30~16:30



モンテッソーリ教育

モンテッソーリ教育は、イタリアの医師マリア・モンテッソーリ博士(1870 年~1952 年)が確立した幼児教育法です。子どもたちは生来、自立・発達していこうとする力(自己教育力)があるという前提に立ち、大人は、子どもに直接何かを教え込むのではなく、子どもたちを観察し、子どもが発達できるように環境を整え、満足いくまで繰り返し活動できる自由な時間を与えることが求められる、としています。

このことを基本にモンテッソーリ保育所・幼稚園キンダーラーデン・シルトクレーテでは、「自立していて、有能で、責任感と他人への思いやりがあり、生涯学び続ける姿勢を持った人間を育てる」ことを目的に、子どもがグループの中で自立して成長できるようにすることを重要視しています。子どもたちには、それぞれ「違いがあって当然」であることを教え、教師の計画どおりに子どもを教育するのではなく、子どもたちを観察し、子どもたちの個性を尊重することで、個々の発達を促しています。



子どもたちの一日

1 歳~3 歳のクラスは、定員 15 名(現在の受け入れ児童数は 12 名)で、保育士 3 名が配置されています。毎日 7:45~9:00 の間に登園することとなっています。9:00 から少人数グループに分かれてミーティング(おやつ時間も兼ねています)を行ったのち、それぞれの活動を行います。グループのメンバーは固定することなく、ミーティングからそのあとの室内や園庭での活動をする中でグループのメンバーは変動していきます。

3 歳~6 歳のクラスは、ひまわり組 16 名、保育士は 4 名(常駐は 2 名)。8:30~9:00 頃に登園し、遊び始めます。遊び道具は、子どもたちの潜在能力を引き出すように工夫が凝らされており、感覚を研ぎ澄ませるものや、言葉や数などの概念を習得するものなどが用意されています。

園舎と園庭について

園舎内は、それぞれの発達段階に適した空間構成を基本に、天然素材の家具や遊具を配した明るく居心地のよい場所となっていました。モンテッソーリ教育に基づいた、子どもたちの発達段階に応じた様々な教材が取りそろえられていました。

また、園舎内と同様に、園庭も子どもたちにとって大切な学習の場となっています。都会の中で失われがちな「自然」を子どもたちに少しでも体験してもらうように意図されており、園庭には野鳥の巣箱やコウモリ用の巣箱などが掛けられていました。また、遊具もぬくもりが感じられる木を中心とした素材でできたものが設置されていました。

モンテッソーリ保育所・幼稚園 キンダーラーデン・シルトクレーテは、周辺環境にも恵まれています。ドレスデン市内に位置するこの園は、すぐ近くをエルベ川が流れており、一年を通して、遠足に最適な場所となっています。子どもたちは、自然体験活動の一環として、エルベ河畔の草原やドレスデナーハイデ景観保護区の森林地帯を定期的に訪れているそうです。また、子どもたちはエルベ川で、大雨や長期にわたる干ばつの影響など、自然現象や気候変動などについても学んでいます。



モンテッソーリ教育に基づいた教材を見せて下さった教育長のシェーンフェルダー氏



園庭には天然素材の遊具のほか、コウモリや野鳥の巣箱がかけられていました



ハイデンオルゲレ森の体験幼稚園

運営団体 ヴァルドツァウバー協会 Waldzauber e.V.

ご担当者 園長 カタリナ・トラウブ氏

Katharina Traub, Leiterin

URL <https://www.waldkindergarten-dresden.de/>

視察日 2026 年 6 月 16 日



幼稚園について

ハイデンオルゲレ森の体験幼稚園は、園舎をもたず、日々、森の中で子どもたちが様々な体験活動を行うタイプの私立幼稚園です。

25 年程前に開園した当初、幼稚園は別の平地林でプログラムを提供していました。園の拡大などに伴って活動場所を変えており、現在の場所にたどり着きました。現在の活動場所は、ザクセン州が所有する森で、森林の面積は幼稚園の職員も把握していないほど広いです。平地ではなく起伏のある地形であること、斜面が北向きでないことなどの希望に叶う場所を幼稚園が探し、ドレスデン市やザクセン州と交渉したと言います。

子どもたちの一日

朝、子どもたちは森の入り口に集合します。“登園”時間は 7:30～8:15 で、先生たちは 8:15 になったら子どもたちを連れて森に入っていきます。森の入り口から活動場所までは大人の足でも 10 分程度かかり、大きな谷を渡っていきます。道の両側は深い森林に囲まれ、歩きながら初夏の野鳥のさえずりを大音響で楽しむことができました。



森の活動場所への道

この園では 1 週間ごとに、おおまかな週間スケジュールを決めていますが、1 日の中で何をすることは事前には決めていません。その日の森の中での活動は、朝集合した時に、こどもたちの意見を尊重して決めていきます。個々の活動については、先生から子どもたちに指示をすることはなく、基本的に子どもたちがそれぞれの興味や関心にしたがって何をするか自分で決めます。使ったことのない道具



ルールを守って道具を使う子どもたち

具を初めて使う子どもには、先生がその道具の安全な使い方などを手ほどきし。ルールをしっかりと教えます。道具の中にはナイフ、ノコギリなどの刃物もあります。刃物の使用も可能ですが、まず、そうした刃物は道具であり、遊び道具ではないことをきちんと伝えたと上で、「使用してよい場所」で使わせます。

森にはトイレはありません。子どもたちは、「スパ・ゾーン」と呼ぶ場所で用を足します。子どもたちの中に

は、「樹木に向かって用を足すこと」がトイレだと認識し、一般的な便器を用いることを不思議に感じる子までいると言います。

一定以上の降雨時には森で遊ぶことを禁止するザクセン州の法律があるため、州森林局が警報を発した場合は、子どもたちを屋内に退避させます。退避のための家はリースしており、荒天やその他の理由で子どもたちがこの家を利用する頻度は月1回程度だと言います。



森の中のシェルター(左)と警報が出た際の退避のための家

幼稚園の運営について

ドレスデン市からの補助金として、子ども 1 人あたり€207/月、施設利用のために€500/月が提供されているほか、保護者から会費として€3.5/月を徴収しています。会費は格安で、運営費というよりは幼稚園のメンバーであることを明確にするためのものと言えます。施設整備などの費用は幼稚園の運営費ではなくドレスデン市の公共予算で賄われる部分もあり、例えば、現在、幼稚園は風力発電施設を整備するプランをドレスデン市に提案しているところです。その必要性を市が認めた場合は、市の事業として施設整備が行われることとなります。

正規の職員は 2 名、そのほかに実習生が 2 名、海外からの留学による研修生が 1 名、お手伝いをしてくれる方などがいます。受け入れている子どもの数は、昨年までは多くても 15 人でしたが、今年は 23 人となっています。毎日全員が登園するわけではなく、保護者が休暇をとる夏の時期は登園しない子どもも多いそうです。加えて、保護者が運営の一翼を担っており、1週間の活動内容の決定などに加わることもあります。



野鳥の餌台と虫宿(上)
ハンモックつるし用の木(右)



案内してくださったカタリナ氏



ベルリン特別市教育青少年家族局

ご担当者 カルシュテン・ヴァイドナー氏 第5部A幼児教育・保育部長

Carsten Weidner, Referatsleitung
VA Frühkindliche Bildung
und Kindertagesbetreuung

URL <https://www.berlin.de/sen/bjf/>

視察日 2026 年 6 月 16 日 16:00～17:30



ベルリン市の保育の概況

ベルリン市内には、約 3,000 の保育施設があります。子どもは、これらの保育施設に 8 か月目以降から通園する権利を有しており、18 万人の子どもがこれらの施設に通園しています。保育施設は共益団体や宗教系の団体によって運営されているものが多く、それに比べると公立施設はあまり多くはありません。

保育施設の需要と供給のバランスは、過去 10 年間常に需要過多で、ベルリン市としては子どもの収容数の拡大に努めてきました。しかし 2,3 年前から、市の人口が減り始めました。主な原因は、生活コストの増大による郊外への流出です。これによって定員割れする保育施設も出てきており、経営を圧迫している状況です。

新しい指針について

2026 年 6 月、ベルリン特別市は保育に関するベルリン全体の新しい指針を策定、公表しました。この指針 BBP(ベルリン教育プログラム)が最終目標にしているのは、ベルリンやドイツではなく、EU が定める基本的人権の概念に合致し、子どもが、自分を受け入れてくれる環境に自分があると認識できるような体制づくりをするものです。

そのために、「リソース(資源)を正しく・有効に利用する幼児教育」を謳っています。子どもがその成長過程で必ずふれて育つ環境要因を 7 つの領域に整理し、それらの環境要因をどのように利用するべきか考察を行っています。その理念が特徴的に表れているのは



ベルリン教育プログラム表紙



7 つの領域の 1 つである「メディア」との付き合い方です。幼少時からスマートフォンやタブレットなどのデジタルデバイスにふれることの是非には議論の余地がありますが、BBP では、デジタルデバイスも子どもを取り巻く環境要因であることを前提として、それらが知識への入り口であることを伝える教育体制を今後数年かけて市内の施設に普及させていくこととしています。

子どもたちの自然体験

BBP では子どもたちを取り巻く物理環境に関する検討も行っており、この物理環境には室内環境とともに野外の自然環境も含まれています。そこでは、子どもたちが好奇心を持って研究・探求を始めるような物理環境を整えることの必要性を考察しています。

一方、都市化の進んだベルリンにおいて、全ての保育施設で自然豊かな園庭を整備することは困難です。約 3,000 施設のうち、園庭がない保育施設が半分程度あると言います。

そこで、ベルリン特別市では自然体験を担保する仕組みが 3 段階に分けて作られています。

一つ目は、学校や幼稚園が園庭にビオトープを作るというもの。

二つ目は、ベルリンを構成する 12 の区ごとに 1 か所ずつ、学校が遠足で訪れて野菜を作ったり自然にふれたりできる公共施設を市が用意するというもの。

三つ目は、ベルリン市内にある大きな森林地域 7 か所を遊べる区域として指定するというもの。これらの森林地域では、子どもたちは自由に遊び方を発見し、大人は見守るだけというのが原則になっています。



対応してくださったベルリン特別市職員の方々

Natur- und Umweltbildung in der Praxis

Drei Beispiele aus Berlin

Grün macht Schule - KinderGARTEN	Gartenarbeitsschulen	Naturerfahrungsräume
Naturnahe Bildungsräume gestalten	Natur praktisch erfahren	Natur frei entdecken
Kita	Bezirksweite Lernorte	Stadtraum
 erleben	 handeln	 entdecken

ヴンメルブーデ保育所・幼稚園

運営団体 ボート保育所・幼稚園団体 BOOT-KiTas.

ご担当者 園長 シルビア・ヘンドリク氏

Sylvia Hendriok, Leitung

副園長 フェリックス・クライゼル氏

Felix Kreisel, Co-Leitung

URL [https:// www.bootkitas.de/](https://www.bootkitas.de/)

視察日 2026 年 6 月 17 日 9:00～11:00



保育所・幼稚園について

ヴンメルブーデ保育所・幼稚園は、1999 年に開設しました。園長のシルビア氏は開設当初から職員として働き、2015 年に園長に就任したとのことで、園のことをなんでもご存じでした。

住宅地の中に作られた園で、200 人の子どもを 45 人のスタッフ(ハウスマイスター含む)が保育に当たっています。子どもの国籍は 20 か国にのぼり、多国籍化が進む傾向にあります。

ベルリン特別市では、6 歳児まで保護者の負担なしで育てることができるように制度設計されており、給食やおやつについても園が用意するため、保護者が子どもに持たせる必要はありません。

保護者への連絡は極力口頭で行うこととしており、タブレットは記録用にとどめています。

子どもたちの一日

200 人の子どもは 9 グループに分けられています。それぞれのグループ(各 23 人)に先生(各 4 名)がついています。毎日、その日何をするか、子どもたちの意見を取り入れながら、先生も意見を出し合い、一日の過ごし方を決めていきます。朝 9 時に登園し、はじめに軽いおやつを食べて、活動を開始します。視察当日は、翌日にフェスティバルが控えているとのことで、子どもたち全員が参加してのダンスのリハーサルが行われました。

園庭について

施設全体の面積は約 5,500m²、そのうち園庭は約 3,500m² あります。「グリーンオアシス」と呼ばれる園庭は、広々として多くの木々や草が生え、各所に木陰がある気持ちの良い空間でした。そうした木々の中には印象的な滑り台が設置されていました。いろいろな植物が生えた場所には、虫宿や野鳥の巣箱が設置されていたり、はだしで踏んで地面などの感触を直に感じるための場所も用意してあったりしました。園舎の窓からは、園庭の緑の中で子どもたちが遊ぶ様子がよく見えます。

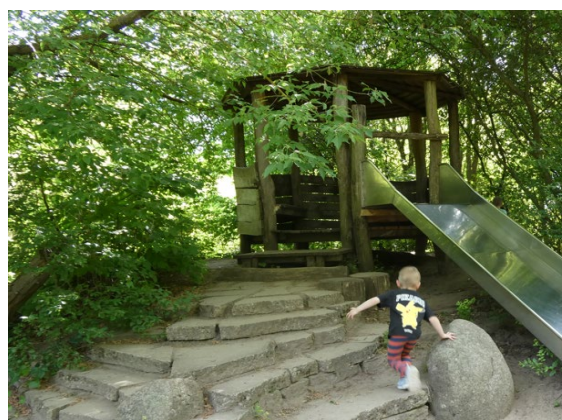
園庭は塀で囲まれているので子どもたちが勝手に敷地外へ出てしまうことはありませんが、子どもたちが園庭で遊んでいる間は先生が複数で見守り対応しているため安心です。園庭に生える樹木での木登りは禁止されていますが、木登りに似た活動ができる場所を別途設けて、子どもたちの「登りたい」要求に対応しています。



窓からは園庭の
緑の中で遊ぶ子
どもたちの様子
が見える



木々がつくる木陰に置かれたベンチ



木立の中の虫宿

エコ・クラインガルテン「ナトゥアーエ・ゲアテン」

運営団体 クラインガルテン振興協会
Förderverein für Kleingartenwesen e.V.
ご担当者 ミンハ・キューゼル氏 Min-Hye Küsel
ハンス・ペーパー氏 Hans Peper
URL <https://www.oekogarten-berlin.de/>
視察日 2026 年 6 月 17 日 14:00~16:00



クラインガルテンとは

クラインガルテン(日本語で小さな庭の意)とは、庭のない市民に小区画の土地を貸し出し、庭づくりや野菜づくりの場を提供する場所のことで、ドイツでは各都市に複数のクラインガルテンがあります。一つのクラインガルテン内には一般的に数十の区画が設けられており、区画ごとに貸し出されます。区画内には、小さいものであれば小屋をせっちしてもよいことになっています。集合住宅などで自分の家に庭を持ってない方が、仕事終わりの週末などに庭づくりや休息を楽しむ場となっています。



区画の中に建つ小屋は
皆屋上緑化されています

運営について

「ナトゥアーエ・ゲアテン」(自然の庭の意)を運営するクラインガルテン振興協会は、1983 年に設立されました。現在、設立当時の関係者の子ども世代が運営メンバーとなり経理係や監査役としてボランティアで働いています。

「ナトゥアーエ・ゲアテン」の区画を借りるには、会費 €250/年、賃料 €250/年がかかります。賃料は、ゴミ処理や除雪、自賠責保険などの費用で、土地所有者であるシュパンダウ地区がクラインガルテン振興協会を通じて徴収します。賃料、会費のいずれも他に比べて安価となっています。区画の借主コミュニティの定例の集まりはありませんが、借主同士での呼びかけなどは回覧板の仕組みを使って情報共有されています。また、区画を賃借に関心を持つ方向けのオープナーが年 1 回開催されます。区画の多くにある小屋は、設立当初に借主が建てたものです。借主が代わる際にその価値が第三者委員会によって評価され、算出された評価額を次の借主が元の借主に支払います。

区画内での庭づくりについて

「ナトゥアーエ・ゲアテン」は生態系保全の視点をもったクラインガルテンです。土地はベルリン市内シュパンダウ地区の所有地で、8,500m²の面積に 28 の区画が設けられています。そのうち 27 区画が個人へのリース、残り 1 区画が共有スペースとして活用されています。

ドイツのすべてのクラインガルテンは必ずしも生物多様性保全のためのものではなく、野菜づくりや園芸品種を使った庭づくりを主としているところも多くあります。ナトゥアーエ・ゲアテンはそうした一般のクラインガルテンとは異なり、設立当初よりエコロジカルな庭づくりをコンセプトに在来種の保全に力を入れてきました。そのためにいくつかのルールが設けられています。

1. 菜園に植える野菜を除いて、植栽して良いのは在来種のみ
2. 殺虫剤や除草剤の使用は禁止
3. 有機肥料(木の切りくずやコンポスト)を使用し、化学肥料の使用は禁止
4. 利用者同士自由に区画の行き来を奨励し、各区画を隔てる垣根などの設置を禁止(通常のクラインガルテンは 1.2m までの垣根が許可されている)
5. 小屋は屋上緑化することが義務
6. 電気を引くのは禁止(ただし小屋の屋上にソーラーパネルを設置した発電は許可)
7. 上水道はあるが下水道は無し。シャワーやスプリンクラー、水洗トイレは不可
8. ペットの連れ込みは禁止。ニワトリを飼育するのも同様に不可 など

この場所は以前、荒れ地のような状態でしたが、このルールの下に各区画で庭づくりを進めたことによって、今では、コンポストがハリモグラの棲みかとなり、池に両生類や爬虫類が暮らし、花咲く野草にハチが集まり、積んだ枯れ木が昆虫など多くの生きもののビオトープとなりました。定量的な調査結果による客観的データではないものの、明らかに生物の多様性が豊かになりました。



2 区画の利用者が一緒に作った池



昆虫のための野草エリア



地面だけでなく、屋根の上も野草が繁茂



昆虫や爬虫類のビオトープとなる石積み

森の中の保育所・幼稚園アンネ・フランク

運営団体 ニューテタル自治体 Gemeinde Nuthetal

ご担当者 園長 シルビア・バーム氏
Sylvia Böhm, Leiterin,

URL <http://www.kita-nuthetal.de/>

視察日 2026 年 6 月 18 日 9:00～11:00



園の運営について

この園はベルリン特別市の公立の施設です。通園する子どもは全員市内在住者で、一番多い時期には 200 人以上が通っていましたが、近年の人口減少に伴い、現在 163 名となっています。公立の施設のためキャパシティに余裕が出ても市内在住の子どものみを受け入れています。そこで、園舎内の空いたスペースを使い、近く、民間(教会系)の託児所を開設する予定とのことでした。

この園のクラスは 1～3 歳児のクラス、4～5 歳児のクラス、6 歳児のクラスの 3 つに分かれています。6 歳児のクラスは、小学校への入学を控える移行期クラスとして 2 年前に新設されました。1～3 歳児のクラスは子ども 4.5 人に対して先生が 1 人、4～5 歳児のクラスは子ども 10 人に対して先生が 1 人の割合で対応しています。



ドイツでは、ナチスによるホロコーストの歴史を反省し、「平和と寛容の大切さ」を伝える象徴的な存在として、「アンネ・フランク」の名前を冠している園が多くあります。これは人種や背景の違いに関わらず、すべての子どもが平和に、そしてその個性が尊重されて育つことができる場所を提供するという教育理念を表すものです。しかし、第2次世界大戦から多くの時代を経て、近年は、施設の改名が議論されることもあるようです。この園においても、現在は「森の中の保育所・幼稚園」であることを強調しており、将来的に「アンネ・フランク」という名称は廃止する可能性があることも示唆されていました。

園舎と園庭について

この場所はもともと針広混交の森でした。しかし、木の病気により一部の樹木が立ち枯れたことで空間ができたため、そこを有効活用してこの園が整備されました。周辺の地域には木の病気を免れた広葉樹などの森もあります。園庭はヨーロッパアカマツが主体の林で、その中に、木製の遊具などがぽつぽつとおいてあります。



環境に優しいエコロジカルな建築の園舎内には、様々な場所に野生の生き物を説明するポスターやイラストが貼られていました。また、自然をモチーフにしたオブジェなども飾られていました。園舎は園庭に向かって開放的な構造となっており、子どもたちの園庭での外遊びを促しているようでした。園庭の木々には野鳥やコウモリの巣箱、野鳥用の餌台などが掛けられていました。それらは、子どもたちが

園庭に張り出したテラスなどからいつでも観察できる位置にあります。また、テラスには森に落ちていたものなどを観察するためのトレーが常備されているなど、園庭と園舎内がシームレスにつながっている感じが感じられました。

園庭にやって来るチョウなどの昆虫を採集したり、殺したりするのは禁止していますが、その代わりに、幼虫がサナギ、チョウへと成長する様子をつぶさに観察できるキットを用意し、それらの観察を通して、子どもたちの自然の探索意欲、発見意欲、知的好奇心が満たされるようしています。



テラスの観察用のテーブル
野鳥の餌台(右)
コウモリの巣箱(右下)



「森：私たちは皆、それに依存して生きている」のサインボード



分析計測機器メーカー クナウアー社

ご担当者 CEO アレクサンドラ・クナウアー氏
Alexandra Knauer, CEO & Owner
庭師 アーニン・フンガー氏
Arnim Hunger, Gärtner
URL <https://www.knauer.net/de/corporate-social-responsibility>
視察日 2026 年 6 月 18 日 14:00~15:30



クナウアー社について

クナウアー社 (Knauer Wissenschaftliche Geräte GmbH) は、ベルリンに拠点を置く HPLC (高性能液体クロマトグラフィー) をはじめとした分析計測機器のメーカーで、全世界数千の顧客を有し、製薬会社などで使用される精密機械を製造し、納品している民間企業です。



クナウアー社の社屋

「自然保護は未来への投資です。だから、クナウアーは環境と自然に深く関わっているのです。」と語る創業者の娘で現在の CEO アレクサンドラ・クナウアー氏は、持続可能な社会づくりや企業の社会的責任を重視して、本業においても国際基準である ISO14001 に則った環境保全に取り組んでいます。所有する敷地内にビオトープを整備している企業の事例として、このクナウアー社を訪れました。

社有地でのビオトープ整備

クナウアー社では、従業員のウェルビーイングも念頭に、本社敷地、道路を挟んで隣接する社員寮の敷地、そして郊外に所有する広い面積の土地で、それぞれ草地環境の保全・創出を行っています。また、ベルリンの郊外に所有する別の土地では、自然の草地を創出する理念に共鳴した地元の農家と提携して、人の手を加えない自然草地の創出に取り組んでいるそうです。これらの草地環境は合計すると、全体で 324,000m² の規模と



敷地内のビオトープ。奥に見えるのは従業員がくつろぐためのベンチと養蜂箱



なります。クナウアー社の訪問時には、本社敷地と社員寮の敷地を視察しました。

本社の敷地には、庭師のフンガー氏が管理する、農薬と化学肥料の不使用に加え、土を耕さない不耕起による、在来の草本による野草草地があります。このビオトープの一角には、土をつくるための場所があり、コンポストを熟成させることによって豊かな土が形成されて

いく様子も観察することができました。コンポストによる土づくりは、1.2m 四方の広さがあればだれでもできるということです。

同じ敷地内では、養蜂家による養蜂も行われています。敷地内には在来のみつばちも生息しているとのことでしたが、ハチミツを取るためのハチは女王バチを別に調達しているとのことでした。ここでとれたハチミツは自社分析機器による分析のサンプルとして利用されているほか、来訪者へのプレゼントなどとしても活用されています。

クナウアー社の敷地は、自然とふれあうことによるウェルビーイングの効果だけでなく、従業員や地域内外からの来訪者への教育的効果も発揮されるように工夫されていました。



在来の草花が繁茂する敷地内のビオトープ



伐採した草や木のコンポスト(右)
それを使った土づくりの場所(右下)



虫宿(上)





子どもの感性・思いやり・自立心を育む

自然ゆたかなドイツの園づくりツアー2026 実施レポート



持続可能な社会を目指し、園庭ビオトープづくりやその活用を通じた自然体験・環境学習を推進する一環で、『全国学校・園庭ビオトープコンクール』、『こども環境管理士』、『ビオトープ管理士』の認証などの取り組みを行っています。
171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル 電話: 03-5951-0244 www.ecosys.or.jp